

久間防衛相の驚くべき発言

久間章生・防衛相が、4月20日付読売新聞朝刊紙上で、北朝鮮の核開発問題に関連して驚くべき発言をしている。「日本にとって、北朝鮮などの核に対する唯一の抑止力は、『日本を攻撃すれば米国の核がさく裂する』ということしかない」と述べたのだ。こう話すとき、久間氏は、さく裂した米核兵器の下で、北朝鮮の市民たちが、広島や長崎の被爆者たちの体験と同じ底知れぬ苦しみを受けることになることを、どこまで思い描くことができているのだろうか。北朝鮮の核実験も、同国指導部の核抑止力信奉も、もちろん許しがたい。だが、核兵器廃絶の先頭に立つべき被爆国の閣僚が、目には目をと、核兵器による報復を当然視してどうなるのか。

同紙政治面『『北朝鮮』インタビュー』での発言。久間防衛相はこれに続けて、「非核三原則を変えて日本が核を持つより、米国が『日本に核爆弾を撃ったら、(報復として)米国も間違いなく撃つ』とはっきり言うておくのが、日米にとって一番良い抑止力だ」などと述べ、ミサイル防衛(MD)推進を力説している。

昨年秋、安倍政権の政府、与党のリーダーらをはじめ好核勢力の間から「日本核武装論」が噴出したとき、私は、この大合唱が目指しているものは、①日米同盟のタガを締めなおし、日本の米核抑止力依存政策を再確認すること。②アメリカ主導の日米核軍事同盟体制を万全なものにするため、日本の国是である「持たず・作らず・持ち込ませず」の非核三原則を破壊すること。③このキャンペーンを通じて、戦後、日米支配層にとって一番頭の痛い問題だった日本国民の「核アレルギー」を解消することにある、と指摘させていただいた。(当会ホームページ拙稿「日本核武装論は何を狙うか」参照)

今回の久間発言もまた、その典型である。5月1日にワシントンで開かれる日米安全保障協議委員会(2プラス2)を前にしての計算も働いているのだろう。やりきれないのは、久間防衛相が被爆地・長崎選出の国会議員だということ。しかも、核兵器廃絶を国際社会に訴え続けてきた伊藤一長・長崎市長が凶弾を浴び、潘基文(パン・ギムン)国連事務総長が「平和な世界の唱道者だった」と声明するなど内外各界から伊藤市長の死を悼む声が寄せられている、まさにその最中の発言だったことである。

読売新聞も、もっと問題発言と位置づけて報道すべきだった。発言をただたれ流すことによって、同紙は、きのご雲の下の地獄絵を日本国民の頭の中から消していこうという日米支配層のキャンペーンのお先棒を担いだ。

私たち市民は、「この苦しみを二度と誰にもあじあわせたくない」という広島、長崎の被爆者、そして、世界中のヒバクシャの思いを共有し、久間防衛相の今回の発言を糾弾しよう。黙っていることは、この暴言を追認することになる。

以上